

私の先生

林芙美子

青空文庫

私は十三歳の時に、中国の尾道おのみちと云う町でその市立女学校にはいった。受持ちの教師が森要人と云うかなりな年配の人で、私たちには国語を教えてくれた。その頃、四十七、八歳位にはなつていられた方であつたが、小さい私たちには大変おじいさんに見えて、安心してものを云うことが出来た。作文の時間になると、手紙や見舞文は書かせないで、何でも、自由なものを書けと云つて、森先生は日向ひなたぼっこをして呆ぼんやり眼をつぶっていた。作文の時間がたびかさなつて、生徒の書いたものがたまつてゆくと、作文の時間の始めにかならず生徒の作品を一、二編ずつ読んでは、その一、二編について批評を加えるのが例になつた。その読まれ

る作品は、たいてい私のものと、川添と云う少女のもので、私の作品が、たいていは家庭のことを書いているのに反して、川添と云う少女のは、森の梟ふくろうとか幻想の虹にじとかいったハイカラなもので、私はその少女の作品から、「神秘的」など云う愕おどろくべき上品な言葉を知った。

十三歳の少女にとって、「神秘的」と云う言葉はなかなかの愕おどろきであつて、私はその川添と云う少女を随分尊敬したものだ。――森先生は、国語作文のほかにも、珠算を時々教えていられたのが尾道と云う町が商業都市なので、課外にこの珠算はどうしてもしなければならなかつた。私の組で珠算のきらいなのは、私と川添と云う少女と、森先生とであつたので、たいていは級長が問題

を出して皆にやらしていた。

森要人先生は、その女学校でもたいした重要なひとでもないらしく、朝礼の時間でも、庭の隅すみに呆すんやり立たつていられた。課外に、森先生に漢文をならうのは私一人であつたが、ちつとも面倒がらないで、理科室や裁縫室で一時間位はずつ教おえを受けた。頭の禿はげあがつたひとで、組でもおぼろ月夜とあだ名なしていたが、大變無口で私たちを叱しかつたことがなかつた。

秋になつて性行調査と云うのが全校にあつて、毎日一人か二人ずつ受持ちの教師に呼ばれて色々なことをたずねられるのであつたが、私たちはまだ一年生で恋人もなければ同性愛もなく、別にとりたてて調べることもないのであつたが一人ずつ呼ばれた。私

も何人めかに呼ばれて、森先生は呆んやりした何時いつもの日向ぼつこのしせいで「どんな本を読んでいるか」とたずねた。私は『復活』と『書生かたぎ』と云うのを読んでいると云つたら、すこし早すぎるとそれだけであつた。

森先生は、私たちが二年になると千葉の木更津中学きさらづへ転任してゆかれた。めだたないひとだったので誰も悲しまなかつた。先生の家族を停車場へおくつて行つたのは生徒で私ひとりであつた。私はそれから、その先生の恩に報いるため、母にねだつては時々名物の餛飩あめだま玉を少しばかり送つた。(坊ちゃんしぼらが二、三人あつたように記憶していたので)暫くして、私たちの国語の教師には早大出の大井三郎と云うひとがきまつた。まだ二十四、五のひと

で、生徒たちにたちまち人氣が湧き、国語や作文の時間が活気だつてきた。夜なんかも、この先生の下宿先きには上級生たちがいっぱい群れていた。私はこの先生に文章俱樂部くらぶと云うのを毎月借りていた。大井先生はまた私に色々な本を貸してくれた。広津和郎すおの『死児を抱いて』と云う小さい本なぞ私は愕きをもつて読んだものであつた。

ある日、昼の休みに講堂の裏で鈴木三重吉すずきみえきちの『瓦』と云う本を読んでいた。校長がぶらりとやって来て、此様な社会の暗黒面を知るような本を読んではいけないと云つた。私は大変いい本だと思ひますと云うと、そのあくる日の朝礼の時間に、校長がひどくさり、小説の害を説いて降壇すると、その後若い国語の大井先

生が「小説を読むふとどきな生徒がいることは困ったことです」と登壇された。私は首をたれていたが、この若い教師の言葉をそのときほど身に沁^しみて考えたことはなかった。その『瓦』と云う本は大井先生に借りていたものであった。森先生に伸^{のび}々とそだてられていた私は、小説を読むことをそんなに害とも思わなかったし、学校で読んで悪いことも、そんなに気にしていなかったのだ、それからと云うもの、私はこの若い国語教師にうっすらと失望を感じ尊敬を持たなくなった。学校へは一切小説本を持ちこまなくなつたかわり、勉強もおろそかになつてしまつて、三年四年となるにつれて、私はせいせきが段々悪くなつて、卒業する時は八十七分の八十六番位で出たと思う。国語も作文も図画も乙ばか

りだった。

その時の校長を佐藤正都知と云った。私の家族はその頃尾道の近在を行商してまわっていたので、学校から帰っても誰もいなかったし、家の前のうどんやで、毎晩、私は夕飯を食べるようになっていた。一ヶ月分の金があずけてあって、夕方になると私はそのうどん屋の細長い茶向台で御飯をたべた。ある夕方、私は御飯をたべてこのうどん屋から出かけると、ちようど遅く学校から帰って来ていた校長に逢った。その翌日、学校から母へ呼び出し状が来たがこの忙がしいのにそれどころではない、面倒なことを云われたら止めてしまえとそのままになった。私は学校中でもない部類の生徒になって、しまいには、何かが無くなっても私に

かぶせられた。新らしい上草履うわぞうりを買ってははいていると、受持ちの図画の市河と云う教師に呼ばれて、その草履は誰それのもではないかと云われた。私は朝、自分でその草履を買ったばかりで名前を書くひまもなかったが、教室へ帰ると、その時ばかりは学校へ火をつけてやりたかった。その草履については、母が、お前の身分としては竹の皮の表でよいと云うのを無理矢理八錢ほどはまらせて、たたみおもて畳表の麻裏を買ったもので、あとで、同組の生徒が告げ口したと云うことを聞き、その生徒の前で怒鳴どなったことがあった。私は、仲のいい友達がひとりもなかった。川添と云う少女とは組が別れて、私は英語の多い級にいたのでめつたに逢えなかった。

私は一年生の時は百人の組くらすで十一番であつたが、卒業する折は、満足に卒業出来るかと心配した位で、好きな学課は、地理と英語と国語と歴史と作文と図画であつた。どれも乙ばかりで、三、四年の頃好きだつた図画も乙ばかりだつた。図画の宿題には、講談倶楽部か何かの口絵を描いて来る少女が一番いいせいせきで、私のように静物や風景を写生してゆくの中には、何時いつも乙か丙をくれた。今考えだしても学校時代は何の愉たのしみもなかつた。私は、あんまり女学校時代のことを書かないけれども、森先生以外にはなつかしいと思う先生がひとりもない。卒業も出来かねた私を卒業さしてくれたのは大井先生だと云うことを同組くらすのものに聞いたことがあつたがこれはうれしかった。卒業写真に、私は黒木綿の

紋もん付つきを着てうれしそうに写っているが、これは下級生の紋付を借り着かして行つたもので母もその当時は、卒業出来るのなら工く面めんしてでも紋付を造つてやつたにと云い云いした。

この学校を卒業して十三、四年になるが森先生は木更津の中学校にいまだにいられるかどうか、私はそれきりお逢いしたことがない、いまでは老齡になつていられることであろう。私はこの先生にだけは逢いたいと思つている。

青空文庫情報

底本：「林芙美子随筆集」岩波文庫、岩波書店

2003（平成15）年2月14日第1刷発行

底本の親本：「林芙美子全集」文泉堂出版

1977（昭和52）年

「林芙美子選集」改造社

1937（昭和12）年

初出：「文芸首都」

1935（昭和10）年4月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-

86) を、大振りにつくっています。

入力：岡本ゆみ子

校正：noriko saito

2008年3月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waizora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

私の先生

林芙美子

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>